

～音楽 研究実践～

旋律の変化を感じ取る活動を工夫することで、 楽曲の特徴を味わって聴く学習

～3年「せんりつと音色」の実践を通して～

谷 口 彩

『音楽研究実践 三年『せんりつと音色』の実践を通して』

I はじめに

音楽科では、表現及び鑑賞の各活動の中で、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり、味わって音楽を聴いたりする力を育成することが求められている。そのためには、音楽から感じるよさや楽しさを音楽を形づくっている要素と関連付けて聴き、聴き取ったことや感じ取ったことを言葉や体の動きなどで表したり、比較したりすることが重要である。

前研究では、表現と鑑賞の関連を図った題材構成を工夫したり、単位時間に効果的に聴く活動を位置付けたりすることで、音楽表現の意欲を高めることができた。また、互いの演奏を聴き合う活動を設定することで、自分の考えや気持ちを伝えたり、相手の思いをくみ取ったりする力の向上が見られた。一方で、思いや意図に応じた音楽表現につなげるための知識や技能の身に付け方や、音楽のよさや楽しさを音楽の要素と結び付けながら感じ取るための手立てを明確にすることについて課題が残った。そこで、本研究では、児童が音楽のよさや楽しさを音楽の要素と関連付けながら捉え、それらを生かしながら音楽表現への思いや意図をもつことによって、学ぶ必要感をもちながら知識や技能を身に付け、豊かに表現する授業づくりを試みた。

本実践は、「ユモレスク」と「森の子もり歌」の二曲を用いて実践した。実践における具体的手立ては三つある。一つ目は、題材構成の工夫である。「ユモレスク」では、楽器の音色を味わって聴き、旋律の変化や反復を捉えて聴くこと、「森の子もり歌」では、「ユモレスク」で学んだ旋律の変化や反復を生かしながら、曲想を生かした歌声を工夫して演奏し、楽曲のよさを感じ取ることをねらいとした。「ユモレスク」を通して旋律の変化を感じ取ることで、「森の子もり歌」でも、曲に合った歌い方を見付け表現を工夫できるようにした。二つ目は、聴かせ方の工夫である。色カードを使って旋律の変化を視覚的に表したり、曲に合わせて実際に体を動かす活動を取り入れたりする手立てを通して、「ユモレスク」の旋律の変化や反復を感じさせた。三つ目は、自己評価の工夫である。自らの思いを次時へつなげるために、一単位時間の学びを明確にする振り返り場面を設定した。以上の具体的手立てを通して、児童が旋律の変化や反復という音楽の仕組みを感じ取り、楽しみながら工夫して歌ったり、味わって聴いたりする学習を目指した。



旋律の変化を感じ取っている児童の姿

II 研究の目的と方法

本研究では、感じ取った楽曲のよさや楽しさ、面白さを、音楽の要素と関連付けて感じ取ったり、聴き取ったりすることで音楽の捉え方を広げ、思いや意図をもって表現できるようにするための手立てを明らかにすることが目的である。そのために、以下の3つの視点から授業や児童の様子について分析する。

- 「表現」と「鑑賞」を関連させた題材構成の工夫
- 音楽的な感受・知覚する力を高めるための音楽活動
 - ・旋律の変化を色カードで感じ取る
 - ・音楽の特徴を体の動きで表現する
- 自分の学びを実感し、次時の音楽活動へつなげるための自己評価の工夫

Ⅲ 結果と考察

1 「表現」と「鑑賞」を関連させた題材構成の工夫

(1) 結果

本題材では、5時間のうち、1, 2時間目に「鑑賞」、3～5時間目に「表現」の時間を設定した。鑑賞教材は、バイオリンが旋律を担当し、旋律の変化と反復が明確な「ユモレスク」である。1時間目では「音色」に着目して聴き、感じたことを交流しながら、曲全体の大体の特徴をつかんだ。2時間目では、「ユモレスク」の旋律に着目して聴き、一曲の中で何度も旋律が変化していることに気付いた。楽曲全体の構造を捉えたり、旋律ごとの特徴をつかんだりすることで、「ユモレスク」を味わって聴いた。3～5時間目では、「森の子もり歌」に合った歌い方を見付け表現した。前時までの学びを支えに、楽曲の構造や旋律の変化を捉え、旋律ごとの歌い方を工夫した。初めて「森の子もり歌」を聴いた瞬間、「あ！旋律が変わった。」「ユモレスクは3色だったけど、森の子もり歌は2色だね。」と楽曲の構造に児童の関心が集まった。「最初に出てくる旋律は青かな?」「静かな感じから、いきなり盛り上がるよ。」「歌詞にも着目すると、1番と2番の歌い方を変えたくなったよ。」と曲に合った歌い方を見付け、鑑賞での学びを生かし、楽しみながら表現を工夫する姿が見られた。

(2) 考察

「鑑賞」から「表現」へとつなげた題材構成を工夫することは、児童の音楽の捉え方を広げ、思いや意図をもって表現するために有効であった。「ユモレスク」を「聴く」ことによって分かったことや感じたことは、「森の子もり歌」を歌う際の表現方法と結び付き、児童の思いや意図を膨らませる支えとなった。曲に合った歌い方を工夫し、学級全体で意見を出しながら歌っていると、「悩んでいる。」と言う児童がいた。理由を聞くと、旋律1から旋律2に移る際に、旋律1の終わりの部分をどうやって歌えばいいか決められないと言う。「確かに、そこは色んな歌い方があって困るよね。」という声が挙がったので、更に理由を聞くと、「旋律1は静かに歌いたいんだけど、旋律2に入る時に盛り上げたらいいか、もっと小さくしたらいいか決めきれない。」と言う児童がいた。旋律の変化を感じ取ることで様々な表現方法のよさに気付く、自分の思いや意図をもって表現しようとする姿が見られた。

2 音楽的な感受・知覚する力を高めるための音楽活動

(1) 結果

本時では、「ユモレスク」の旋律の変化や反復に気付かせるために、聴かせ方を工夫した。まず、楽曲を聴く際に、グループAは紫（旋律3）、グループBは水色（旋律1）、グループCは黄色（旋律2）のカードを持ち、旋律の変化を感じたときにカードを上げた。児童の持っているカードが旋律の変化と共に変化していくので、「次はどこのグループだろう。」と楽しみながら楽曲を聴いていた。カードの並び方を視覚的に確認することで、「黄色と水色は繰り返されているね。」と楽曲の構造を感じ取ることができた。次に、楽曲に合わせて体を動かす活動を取り入れた。旋律1では、「手が細かく縦に動いたよ。」「スキップや小さい揺れが合う。」旋律2は、「手を左右に大きく動かせる感じがする。」「くるくる回りたい。」旋律3は、「大きく揺れる。」「一歩踏み出す感じがする。」と、自分の体の動きを生かしながら曲の特徴を捉えている姿が見られた。



写真1 色カードで旋律の変化を感じ取っている姿

(2) 考察

旋律の変化を感じ取るために聴かせ方を工夫することは、音楽的な感受・知覚する力を高めるために有効であった。カードを用いて旋律の変化を感じ取る活動では、楽曲を通して聴き取ったカードの並びを見て多くの気づきを交流した。「水色の後は絶対に黄色がくるよ。」「水色は3回も出てくるから、この曲の中心の旋律だと思う。」「紫が1回しか出てこないのは、一番盛り上がる大事な旋律だから。」「この曲はたくさん繰り返しがある。」と楽曲全体の構造にも着目することができた。また、「一人だと分からなかったけど、友達に合わせてカードを上げたら変化が分かった。」と周りの友達と一緒に学びを共有する児童がいた。

体を動かす活動では、旋律に合わせて体を動かすことで、旋律ごとの特徴を捉えた。自分の体の動きを説明することで、感じ取った音楽の特徴が明らかになり、楽曲に対するイメージを膨らませることができた。「なぜ体を動かすの?」と児童が思わないように、目的を明確にすることや、児童の動きを制限しすぎないような活動場所を用意すること、児童の動きを取り上げて共有する場面を効果的に位置付けることが反省として残った。



写真2 楽曲に合わせて体を動かしている姿

3 自分の学びを実感し、次時への音楽活動へつなげるための自己評価の工夫

(1) 結果

本題材では、自らの思いや願いを次時の音楽活動へつなげることを大切にしてきた。音楽活動への見通しをもち、意欲を高めながら次時の活動に向かうために、一単位時間の振り返りを授業の最後に設定し、学びを蓄積した。授業の始まりには、前時の振り返りを読み返すことで、既習事項を明確にして、「今日は～な風にやってみたいな。」という思いを大切に、学習に臨んでいた。



写真3 自分の学びを実感している姿

(2) 考察

ワークシートを活用し、一単位時間を明確に振り返ることは、意欲を高めながら次時の活動に向かうための自己評価の在り方として有効であった。児童は、ワークシートを読み返すことを通して、「ユモレスク」と「森の子もり歌」の共通点を見付け、また、「森の子もり歌」を歌う際には、「ユモレスク」で感じたことや見付けたことを手掛かりに歌い方を工夫していた。曲に合った歌い方を工夫していく中で、自分たちの思い通りの演奏に近づき、「森の子もり歌」を工夫しながら歌うことを楽しんでいる姿が見られた。

日付	課題
7/1	曲に合った歌い方をくらうよ。 へんかじ=と=3を 感じとっていきまね!!
～思ったこと・感じたこと～	
森の子もり歌をくらうして歌えて、うれしかったです。はじめはなめらかにして、曲がかわるところからはおちついた感じにしました。こんどは <u>強弱をくらうして</u> 歌いたいです。 ちがう曲にも生かしていけるね。	

資料1 児童の振り返りシートより

IV まとめ

本実践では、旋律の変化や反復という音楽の仕組みを感じ取り、楽しみながらその表現を工夫して歌ったり、味わって聴いたりすることをねらいとしてきた。音楽の仕組みを感じ取るために効果的な手立てとして、「表現と鑑賞を関連させた題材構成の工夫」「音楽的な感受・知覚する力を高めるための音楽活動」「自分の学びを実感し、次時の音楽活動へつなげるための自己評価の工夫」の3点から論じた。以下に、その成果と課題を示す。

1 成果

成果としては以下のことが挙げられる。

- 題材構成を「鑑賞」から「表現」へつなぐように工夫することで、「鑑賞」で感じたり表現したりしたことを「表現」で生かすことができた。「鑑賞」での学びにおいて、自分なりに音楽を捉え、見通しをもって「表現」することができたため、「どうしてそう感じたか。」「なぜそう表現したか。」という自分の思いや意図を大切にすることができた。
- 旋律の変化や反復という音楽の仕組みを感じ取る際に、色カードを活用することによって、児童は旋律の変化を視覚的に捉え、楽曲の構造を理解することができた。変化を感じることに難しい児童も、周りの友達に合わせて活動することで、変化を捉えることができた。
- 自分の学びを実感し、次時への学習へつなげるためにワークシートを活用したことは有効だった。児童は本時の課題を意識しながら前時の学習を振り返ったり、見通しをもって学習に取り組んだりすることができた。

2 課題

上記のような成果を挙げることはできたが、以下のような課題が残った。

- 曲に合わせて体を動かすことは、曲の特徴を捉えやすくなるという効果がある一方で、課題も多く残った。ただ体を動かすだけの活動にならないように、「楽曲に合わせて体を動かすことで、何を感じるのか。」という目的を児童に理解させる必要がある。また、楽曲を聴いた後で体を動かすのか、動きの中で楽曲の特徴を感じ取っていくのか、鑑賞の授業のどの場面で位置付けるのかを明確にすることも重要である。児童の自由な発想や思いを表出し、全体で共有していくために、活動場所についても今後の実践の中で研究していきたい。
- 発達段階に合ったワークシートを作成し、児童の思いや願いを表出しやすいように更に研究を進めたいと考える。

V 参考文献

- 小学校指導要領解説 音楽編 文部科学省 平成20年8月
- 学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申） 平成28年12月
- 初等教育資料No.947「音楽科において育成を目指す資質・能力」
文部科学省初等中等教育局教育課程課 東洋館出版社 平成28年12月
- 初等教育資料No.948「学習指導要領における指導のポイント〔音楽〕」
文部科学省初等中等教育局教育課程課 東洋館出版社 平成29年1月
- 教育音楽小学校版 「ここまできた！ICTを活用した最新授業」 音楽之友社 平成28年12月
- 教育音楽小学校版 「〔共通事項〕でさがす鑑賞教材」 音楽之友社 平成29年1月
- 小学校音楽 「授業マネジメント」 中山 由美 明治図書 平成27年9月

音楽部会

司会者 青井加奈恵 (旭川市立神楽小学校教諭)
助言者 米津 洋伸 (北海道立教育研究所研究研修主事)
菅原 修 (旭川市立江丹別小学校校長)

I 授業の部会から ※主なものを抜粋 〈授業者から〉

「学びをつなぐ子供を育てる教育活動の展開」を全体研究の主題とし、1年次研究がスタートした。音楽科では1年次の研究テーマを「音楽的な感受・知覚する力を高め、自らの思いや意図をもって音楽活動に取り組む学習づくり」とし、研究を進めてきた。

本時では、カードを使ったり体を動かしたりする活動を通して、旋律の変化を感じ取り、楽曲を味わって聴く児童の姿を目指して授業を行った。楽曲に合わせて体を動かし、旋律の特徴を感じ取らせる活動において、児童の動きを制限しすぎてしまったことが反省点にある。

活動の目的を児童にしっかりと把握させ、授業のどの場面で位置付けるのか、その活動場所などについても、考慮が必要だったと感じた。

【感想】

授業全般に関して

- 声のトーンが良い。声の抑揚がはっきりしているので、聞きやすいし児童がついてくる。
- 児童との信頼関係ができていた。対話を繰り返していくことで学びを深められていた。
- 板書が見やすく丁寧だった。色使いも工夫されていた。

色カードに関して

- 色のカードを使うことで「旋律の変化」を捉え、児童の理解が深まっていた。色カードは、一人が3色持つのではなく、1色ずつ持ったことで明瞭になり良かった。一人3色だと、煩雑になっていたように感じた。中には、周りの子の動きを真似ている児童もいたが、真似ることで旋律の変化を感じ取っていた。支援が必要な児童への手立てとしても有効だと感じた。
- 色で曲をイメージさせる発想が面白い。児童のイメージの多さに驚いた。
- 色カードを動かしている児童の動きを取り上げてもよかったのでは。

体の動きに関して

- 体の動きをもっと取り上げてあげればよかった。先生の動きを真似するようになっていた。真ん中のスペースを使い、よい動きの子に合わせて、全体で共有することもできた。旋律1から旋律2に移る間を体で感じさせることで、どのように変化したかに触れることもでき、もっとイメージを広げることができたのではないかな。
- 体の動きで示すのは良いことだが、知覚と感受の姿にはつながらないのでは。具体的な手立てを講じることで、知覚と感受が分断しているように感じられたので、連続した手立てが必要だった。カードのまま、体の動きにもっていくのもよかったのでは。
- もっと問い返しをすることで、児童の思いを共有し、学びを深めることができた。



Ⅱ 助言者からの講評 ※要点のみ

(1) 米津 洋伸研究研修主事より

子供たちの素敵な歌声、授業での学びの姿が素晴らしかった。題材構成についてだが、附属小学校の音楽科として「鑑賞」と「表現」を関連付けた題材構成を大切にしていることが分かる。それを貫くために、どの共通事項を用いて指導していくのかを位置付けていることはよいが、位置付けた共通事項や学びをどのように次時に生かすのかについては、今後の課題となる。前時の学習をもっと焦点化して、具体的にすることで学ぶ方向をより明確化できたのではないか。また、振り返りの場面において、本時の学習で学んだことを、次時の学習にどのように活用させるかを明確にするために、次時で取り扱う「森の子もり歌」を聴かせ、第1次で学んだこととの関連を実感させるとよい。取り上げた共通事項を題材を通してどのように生かすのかは今後のカリキュラムマネジメントの部分とも関わってくる事項なので、意識するとよい。身体表現については、今大切にされている幼少の連携を大切にしたい。幼稚園での学びをどのように小学校でも取り上げるかは、今後の課題である。いきなりやろうと思っても難しいので、日常の取組を積み上げていくことが重要である。授業に関わっては、カードの扱い方が良かったが、身体表現の目的が児童に明確にはなっていない部分があったので、活動には必ず目的を理解させることが大切である。音楽科のカリキュラムマネジメントとして、子供の発言内容を押さえて次時に生かしていくことが音楽科の小さなカリキュラムマネジメントにつながっていくので、学びの過程をコントロールしながら、題材を構成する必要がある。題材を通して、「何ができるようになるか。」「何を学ぶのか。」「どのように学ぶか。」「子供一人一人の発達をどのように支援するか。」「何が身に付いたか。」「実施するために何が必要か。」を音楽科として意識し、意図的、計画的にマネジメントしていく必要がある。

(2) 菅原 修校長先生より



児童と一緒に和気あいあいと進める姿が印象的であった。授業はまずは「楽しい。」と感じることが大切で、それができている授業だった。カードや体の動きで要素や仕組みを感じ取って、共有としてという授業の流れは分かりやすかったと感じた。「めあて」から「まとめ」のことについては、「旋律の変化を感じ取り、よさや面白さを味わって聴く。」とあるが、これは一見一つのことに感じるが、そうではない。感じ取っている場面は授業の中身も盛り上がり、児童が楽しみながら学んでいる姿が見られてよかったが、よさや面白さを味わって聴くということに関しては、「よさや面白さ」とは何か「味わって聴く」とは何かと、児童を混乱させてしまうことにつながる場合もある。授業の後半で児童が言っていたように、「旋律の変化を感じ取ろう。」でも、十分に児童は旋律の変化を感じ取ることで、楽曲のよさや面白さを捉えて味わって聴くことができていたように感じる。「まとめ」はどの教科でも、子供の思いや感じたことを基にしたものが好ましい。語彙力や自分の感じたことを伝えたい児童が多いので、問い返しによって深まった児童の言葉でまとめをすることで、「めあて」から「まとめ」までが一貫し、より児童の学びが深まったのではないか。「どんな感じ？」という発問は、児童からいろんな方向の言葉を引き出すことができるので、こちら側で仕分けができるのであればよい発問となる。鑑賞の授業において、あまりにも音楽的な要素にばかり着目させた内容にしてしまうと、面白くない授業になってしまうので、偏りすぎないことが大切である。日常の声掛けや取り組みがあつての手段となるので、今後も大切に実践を積んでほしい。